和教時報

2020年９月15日（火）発行　第1965号（毎月15日発行）
発行所／〒640-8269 和歌山市小松原通3-20　和歌山県教職員組合
TEL 073-423-2261　FAX 073-436-3243　情宣部長／山口法之
1部　20円（購読料は組合費に含みます）

ポストコロナの学校で

「夏休みが終わり、学校には子ども達の笑顔が」と学級新聞を書き出したいところですが、マスクの影に隠れ、子ども達の日焼けした顔や表情を掴むことが困難になっています。まさに『特別の夏』でした。「どこにも行けなかったので、学校に来て友達と会うのが嬉しい」と素直に喜び合う子ども達。その様な中ある先生は「家ではご飯をちゃんと食べていないから給食が嬉しい様だ」と、子どもが育つ環境を含めて、登校してくる子どもの姿を見ていました。また最近、学校へ行きづらい子どもに届けられる宿題の是非や、休み明けの子どもの自死に関する新聞記事を目にします。従来から学校教育が抱える問題に更に複雑な要素を含み、子ども達の心の闇を感じずにはいられません。

全国的に教職員、保護者を含め、少人数学級を求める声が高まり、八月一九日中央教育審議会特別部会では少人数学級を含んだ「中間まとめ（骨子案）」が出されました。しかし、仮に教育予算が増額され少人数化が進んだとしても、その見返りの様に教育の成果が求められ、競争に煽られる学校では意味がありません。教育の市場化、商品化が進む限り、更にスタンダード化に拍車がかけられてしまいます。学校再開から続けているマスクの使用や健康チェック等は「みんながしているから」「一緒のことをしないと何を言われるか分からない」という様に『同調圧力』が知らず知らずのうちに誹謗、中傷として広がり、社会問題化しています。先生の顔色を見て発言したり、忙しそうにしているので思いを飲み込んだりするような子どもはいないでしょうか。今年オンライン開催された全国教研で舩越勝先生（和歌山大学）は『支配的な秩序が乱れた時に子ども達は「楽しい」と感じ、スタンダード化が進むと「楽しくない」と感じる』と過去の災害時の学校や子ども達の様子を踏まえて語っていました。コロナ禍は日常を壊した上、支配的なスタンダードを広げ続けています。子ども達の「楽しくない」が「苦しい」に変わらないことを切に願います。

ピンのスポット 387

新型コロナウィルスの感染が拡がっています。八月六日付けで文科省から消毒の仕方について「机・椅子の特別な消毒は不要」などの変更の通知がありました。確かに現場は消毒作業と通常以上の学校運営を強いられ、多忙な毎日です。しかし、感染が拡がりワクチンなどが開発されていないのに、消毒作業を緩めていくことに科学的根拠があるのでしょうか？これまでの対応との整合性は感じられません。「真理を希求する」教育に対して、教育行政のこの対応に憤りを感じます。私は支援学校に勤務していますが、基礎疾患のある子どもが多く通っています。教育委員会の言う通りではなく、子どもたちのためにどういった対応が必要か各学校で議論を行うことが大切だと考えています。（Y）

オンライン開催!! みんなで未来をひらく教育を語るつどい

リレートークで参加！

宮前小分会　龍神　美紅（全教青年部常任）

まず、忘れたくないのが二月二八日のこと。泣きながら帰宅したのを覚えています。お別れの日は、突然やってきました。子どもたちと大切な約束をしていた日でした。

二年生で担当した子どもたちは、たくさんの課題を抱えていました。そんなみんなが三学期にもなれば落ち着いてきました。

みんなで頑張ったことがあれば「★」をためていき、一〇個たまれば自分たちのしたいことができる日

で、「パソコン室に行って学びたい」という、ようやく自分たちでやりたいことを叶えられる日でした。

「連絡帳いつ書かす?」「やってないテストどうする?」「何をもって帰らす?」「本当に終わり?」という職員室のパニックと、職員会議三昧。結局、ゆったりとその「約束」を十分にはかなえてあげられませんでした。

総理大臣があんなふうに急に決めていいのか、教委の独自性はないのか、と憤り、悲しみ、悔しかったのを覚えています。

私たちの毎日は、以前にも増して、忙しさに追われています。これまでにはなかったことをどうしていくか、と職員会議では議論を重ねます。「一年生の給食に六年生は手伝いにいってもいいのか」「体育の時にマスクを外すのは、その場所にいってからではないか」など…。「しんどさ」は、散在しています。

毎日の消毒、トイレ掃除。体温カードチェック。給食では「前を向きましょう」「静かにしてね」と言わなければならない。何か集まる時には「マスクをつけてね」と。幸いにも学習進度は、学年で「無理をしないでおこう」と慌てず、考えながら進めることができています。六月の再開時に、ベテラン組合員の先生が「みんな焦っているのが目に見える。学級開きもできていないから、ゆっくり向き合おう」と職員会議でいってくださったことが大きな支えです。

それでも子どもの本来の姿は、きっと変わりません。今年は一年生の担任をしています。休校中には、保護者や子どもの声をなるべく登校日に聞き取り、学級通信でお互いを知れるようにしました。

子どもたちは、毎日元気に来てくれます。「先生、傘壊れてママに怒られるん嫌やから秘密にしてたん。バレやんかったわ（笑）」とか「こんなに雨降ってたら給食濡れちゃうなぁ」とか「弟熱出してるから、パン持って帰っていい?」いろんな話を教えてくれます。もちろん、楽しいことばかりではありません。

コロナ禍で、学校の役割が問われていると思います。制度面、不登校の問題など。しかし、学校がほっとできる場であるべきというところは、変わらないと思います。一教師としてできること。これからも、子どもの願いを聞き、悩みながら楽しくやっていきたいです。

◇◇◇

自由に語り合うことの大切さを再確認

和歌山市支部　組合学校

今年度の組合学校のテーマは、「〝子どものため〟を問い直す～コロナ禍のもと、学校が大切にすべきこと～」とし、参加者のグループ討論を中心にすすめました。

このテーマを設定したのは、コロナを理由に、夏休み短縮をはじめとして、今まで当たり前に行われていたことがあっさりと変更されています。それは学校行事・授業にも影響が大きく、本当に大切なことを見失ってしまわないだろうか、また逆に、今までやってきたことを整理するチャンスでもあると考えたからです。

また、グループ討議を取り入れているのも、コロナ対応で日々忙しい中、なかなか毎日を振り返る時間もないので、それぞれに語りたいことを語ってもらい、語り合う中から中心的な課題を見つけていこうと考えているからです。

グループ討議の中で、授業についての話が出たとき、「『民研だより』で市川先生が、教育課程を自主編成することが大切だ」と言っておられたことが話題になり、そのことを知らなかった組合員に「『民研だより』読んだらいいで。『和歌山の子どもと教育』はもっといいで」とさらに語り、その場で『和歌山の子どもと教育』の購読者が一人増えました。

出席者の感想としては、やはり毎日忙しいので、学校の外で自由に話し合える時間は貴重だと言うことでした。

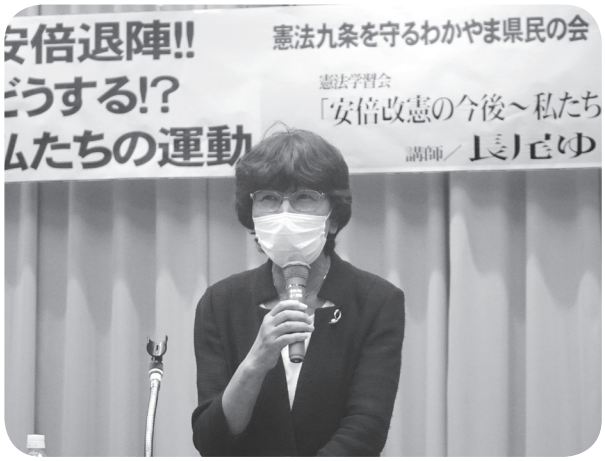
市民と野党の共同で「安倍政治」「9条改憲」に終止符を！

九月九日に「憲法九条を守るわかやま県民の会」の総会が開催され、全労連前副議長の長尾ゆり氏から「安倍改憲の今後」をテーマに記念講演がありました。

菅政権、「安倍政治・改憲」の継承を表明

九月一六日に発足した菅内閣は、安倍政権の「実績」を讃え、改憲策動だけでなく、経済や外交、沖縄米軍基地建設等、多くの政策を「継承する」と表明しています。

講演で長尾氏は「安倍氏の退陣は健康問題だけではなく、政治を私物化し、憲法を無視する政治に対する国民の批判が高まり、支持率が急落したことも大きな要因で、菅首相は官房長官としてその安倍内閣を支えてきた」と厳しく批判しました。



市民と野党の共同の力で！

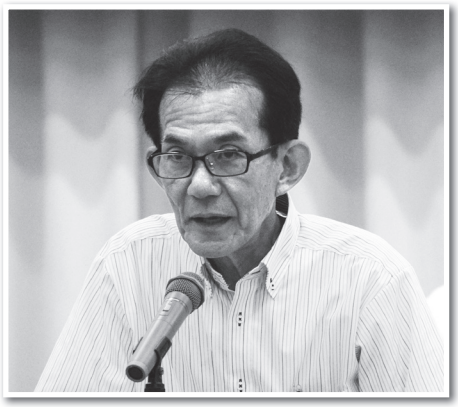
安倍氏は首相在任中の「九条改憲」に固執していましたが、「立憲主義回復」「安倍政治を許すな」をスローガンに、全国で市民と野党の共同が大きく広がり、在任中の九条改憲を阻止することができました。しかし、菅首相は「憲法審査会で自民党改憲案の議論を進めていきたい」と発言しており、首相が代わっても、改憲勢力は「九条改憲」やコロナ対応を口実に「緊急事態条項創設」など、改憲策動を強めてくることが予想されます。

次期総選挙で改憲勢力を少数に追い込み、完全に改憲を断念させるため、市民と野党との共同をさらに広げていきましょう！

私の
human library

3 コロナ禍の学校と子どもの人権

海草支部　大東小分会　**助野　公彦**



コロナ渦中の学校は息苦しい。教室一杯の子どもたちがマスクで顔を覆い、たいした距離も取れずに息を潜めて勉強する姿は異様です。学校は本来、安全に安心して過ごせる場のはずです。子どもはもちろん教師の人権も守られているか疑問に思うのは私だけではないでしょう。そんな教室の風景を前に、私は、当時民研事務局長をされていた故岩尾靖弘先生の言葉を思い出しました。八〇年代始め、岩尾先生は体罰否定の連載を和教時報で特集されました。私はまだ教職数年目、先生は私に「教育の神髄は子どもの自発性」と語られ、子どもの人権について熱く話されました。それまでは、教師の目線でしか発想できなかった私にとって、「はじめに子どもありき」の価値観への転換のときでした。先生の話は単に教師の体罰否定だけではなく、人権が息づく学校づくりを見据えていました。

その後、子どもの権利条約の後押しもあり、子ども主体の学校へと向かいつつあるかにみえましたが…。確かに今、体罰を肯定する人はいません。しかし、過度な競争や管理など本質的なところで、子どもたちの権利や人権がないがしろにされてきたことは間違いありません。いみじくもこの三〇数年の矛盾がコロナであぶりだされました。二メートルは保っても心の距離が縮まる二〇人以下学級、競争に左右されないゆとりある教育課程。コロナ後の学校、決して夢ではありません。今、息苦しさの密を避けることが、岩尾先生の話された人権が息づく学校への第一歩ではないでしょうか。